

書 評

横山千晶著『ジョン・ラスキンの労働者教育
——「見る力」の美学』
(慶應義塾大学出版会、2018)

花角 聡美



本書は、その冒頭で述べられているように「19世紀に起こったささやかな、それでも重要な教育活動と私たちをつなげ」るきっかけを与えてくれる (p. 5)。労働者教育というものを通して、現代にもつながるリベラルアーツの概念を解説する、そんな一冊であると言える。

第1章「労働者大学の創立」、第2章「ジョン・ラスキンと労働者大学」では、労働者大学創設の経緯、またそこにラスキンが関与することとなるきっかけが説明されている。第1章にあるように、労働者大学の発端はラスキンにあるわけではない。19世紀当時、階級間格差のみならず、同じ労働者の中でも熟練者、未熟練者の間には大きな溝があった。それは当然のごとく貧困層問題を派生させており、その救済へと動き出したのがF・D・モーリス (1805-1872)、F・J・ファーニヴァル (1825-1910)、J・M・ラドロウ (1821-1911) であった。12ページに引用されている「教育及び出版委員会」が記した趣旨と目的によると、ここで目指した組織は、教師が一方向的に何かを教えるのではなく、学生を含めて一体となり、自治と自活に重点を置いたものであったことがわかる。のちに詳しく触れられているが、自らの目と手を使うことを重視するラスキンにとって、受け身にならない学生の姿は、おそらく共感できるポイントだったと考えられる。

ラスキンは大学設立の趣旨に賛同したとはいえ、当初の構想から講師陣に加わっていたわけではない。もともとファーニヴァルが依頼したのは寄付であったのだが、その依頼に対し、ラスキンは金銭的援助のみならず、なんと自らがクラスを受け持つことを提案した (pp. 17-18)。何がラスキンをそこまで駆り立てたのか、著者はその要因を三つ挙げて分析している。

まず一つ目の理由は、私生活においてエフィとの結婚が解消される危機から不安を抱えていたということ。二つ目は、政府主導のデザイン教育に強い反感を抱き、それに対して声を上げるという責任感と使命感。そして三つ目は、若い画家たちを導いていこうという意識。「慣例化したルールよりもじかの経験と対象に向き合うことの大切さ」を掲げ、若手芸術家が教壇に立つ機会を設けることにより、「自然に即して描く」という信条を基にしたラスキンの教授法に触れることが期待された (pp. 26-27)。これらが相まって、ラスキンは自ら労働者教育を担当すると申し出たのである。こうして講師陣の最後に名を連ねたラスキンの名前は、当時の議事録の写真 (p. 14) をよく見ると、確かに他の講師たちとは異なるインクで後から付け加えられていることが見て取れる。あまりに著名な彼の名は、文字通り「浮いてしまって」いたようだ (p. 15)。

続く第3章「労働者大学、開校する」では、ラスキンの素描クラスが人気を博していたことを数字とともに知ることができる。そして第4章「労働者大学とラスキンの関係」、第5章「素描クラスの教授法」では、ラスキンが労働者大学の教壇に立った意義、またラスキンによってもたらされたものが解説されている。特に彼の貢献は特筆すべきもので、講師の一人として名前を添えるだけでも、莫大な宣伝効果を持つことはいままでのないが、学びの場を環境・設備面で整備することにも労力を惜しまなかった (p. 54)。まずラスキンは無給でクラスを受け持ち、寄付金や図書の寄贈といった経済的なサポートを行った。それに加え、彼は「良質の画用紙をわざわざこのクラスのために作らせ」ている (p. 54)。もちろんそれを含む必要な画材はラスキンによる寄付である。こうした彼の尽力の背景には、国定の指導法であるサウス・ケンジントン方式の否定があると著者は見ている。これが先に挙げた「自らの責任感」であり、「芸術」の再定義につながる。国が推奨した教育法は「画一的、かつ機械的な指導法で、実利と実用を目的とした技術を身につけることを目指して」おり、競争原理を採り入れていた (p. 64)。ラスキンは競争というものの自体を嫌うのに加え、芸術がビジネスと結び付けられていることに嫌悪感を抱いた。画材、環境といった土台整備を自らが行うラスキンという強力な味方を得たことにより、官立のデザイン学校と協力体制を築くという案は一蹴されることとなった。

商業的成果を目的としないのであれば、ラスキンが目指す芸術教育とは何か。彼は素描を「応用的な技術ではなく、リベラルアーツのひとつであり、様々な教養とつながるものとして捉えていた (p. 65)。これは労働者に教養を与えることが、よりよく生きることにつながる、と考えるモーリスの価値観と重なる点である。モーリスによれば「artという言葉自体が労働者のアイデンティティに深く根ざしていた」、つまり art と「Artisan (職人)、Artificer (技士)、Artist (芸術家)」という言葉は、……密接に関係し合っている」(pp. 57-58)。著者は「単にモーリスが大学教育の中での芸術の意義を認めていることのみではなく、芸術を学ぶこと、職人としての学生の役目とアイデンティティをつなげている点」を指摘し、ここにラスキンとの芸術観の共有を見ている (p. 58)。さらに art と artisan、artificer、artist という語がの密接な関係が示すように、芸術が「職業とその根底でつながっている限り、教養であるとともに、彼らの日々の^{アート}技術をさらに新たなレベルに引き上げる役目を負っていたことも確かである」という (p. 59)。

第5章についてももう少し触れておく。それは第2節「正しく見ること」が、この著作の中で間違いなく根幹となる部分だからである。副題にあるように「見る力」というのは、ラスキンを読む上でひとつのキーワードである。視覚というポイントを考察する上では、ジョージ・P・ランドウ著『ラスキン——眼差しの哲学者』(横山千晶訳、日本経済評論社、2010年)を合わせて読むことをお勧めしたい。視覚が重要である理由、それは「ラスキンにとって『見る』という行為はすべての基礎」であり、「見る」ことはつまり「理解する」ことだからである (p. 68)。さらに横山氏によると「描くこと」は「見ること」であり、「私たちが自分を取り囲む環境を正しく感知し、その下で自分たちの命をより豊かなものとして想像し、次の創造へとつなげる役目を果たす」のだという (p. 70)。また、ランドウの指摘によると「ほかの作家であれば『考える (think)』とか『了解する (conceive)』という言葉を使ったであろうときに彼は視覚的な用語」を用い、また「普通なら『理解する (understand)』、『とらえる (gasp)』あるいは『思う (think)』という言葉が用いられそうなところで、代わりに『見る (see)』という言葉を使ったのである (ランドウ p. 41、横山 p. 69)。つまりラスキンにとって、自らの眼でものごとを見る、知覚することによってはじめて「もの」を創り出すこ

とができるのであり、素描はそのためのトレーニングでもあったということである。

第6章「ロセッティと新たな兄弟団」、第7章「労働者大学以後」では、ラスキンを駆り立てた理由のひとつ、若い世代との関わりが記されている。特に若い世代にとって教えるという行為を通し、自らも学ぶことができた、その機会が与えられたというのは労働者大学の功績でもあり、ラスキンのおかげである。

「よりよく生きることと密接につながっているという意味でまさに『リベラル』な教育」がラスキン流であり、「私たちの時代にもその意義は通用する」という著者の指摘には、全面的に同意できる (pp. 70-71)。情報を含む様々な技術の進歩が目覚ましい現代社会において、あらゆることが瞬時に、画面の中で済まされることが増える一方、我々は自身の身の回りで起こることを知覚し、ものごとを直接経験することが減ってしまったように思う。「自分の視覚を取り戻すことは、19世紀から引き渡された重要な遺産」(p. 101) であるとして締めくくられている本書は、ラスキンの教育について新たな知見を与えてくれるだけでなく、社会が変化し、便利になることで忘れがちな「自分の」眼でものを見るという基礎に立ち返る、その大切さを教えてくれる。

——日本女子大学文学部助教